

ワシントン情報、裏 Version

2005年7月4日

竹中 正治

「殺戮される恐怖の堪能:映画 War of the Worlds」



<http://www.waroftheworlds.com/>

懐かしい古典SF小説の映画化である。ご存知の通り、19世紀末期から20世紀前半に活躍したSF小説創成期の巨匠、H.G. ウェルズ原作の映画化である。原作「宇宙戦争“The War of The Worlds”」は1898年の作品である。私のようなオールド・SFファンでなくても、ウェルズの作品で「宇宙戦争」、「タイムマシン」、「透明人間」など代表作を知らないひとはないだろう。小学校の図書館にもこれら作品群は並んでいる。実際、私も小学校高学年の頃、小学生用簡訳版でこれらを読んだ。その記憶が今でも残っている。

【1953年版の映画“The War of the Worlds”】

勿論今回の映画化は最初ではない。1953年に米国で“The War of The Worlds”のタイトルで映画化されている。私はこの映画も「日曜洋画劇場」で子供の時に見た。映画では異性人の戦闘マシンが「円盤型(Flying Saucer)」になっていて、空中を浮遊しながら、光線(ビーム)砲で街と人間を焼き尽くす。米軍が出動して戦うが、まるで歯が立たない。人類最後の望みを託して超音速爆撃機が水爆を侵略者の戦闘マシン軍団に投下する。巨大なキノコ雲が上がり、一瞬攻撃は成功したかに見えたが、戦闘マシンは「バリヤー」で守られ、無傷だった。絶望する人類を救ったのは…？ その後の結末は原作の通りである。

ところで、この「バリヤー(Barrier)」なる代物、「光線銃(Beam Gun)」、「ワープ航法(Warp)」、「瞬間移動(Transportation)」等と並んでSFに欠かせない7つ道具のひとつであるが、「強力な電磁力によって作られた防壁シールド」という極めていい加減な説明しか聞いたことがない。SF作家諸兄には、もっと真剣に「疑似科学的説明」を提供してもらいたいものである。

【パニックを起こした1938年のラジオ放送】

1938年にオーソン・ウェルズの脚本で、NYのラジオ放送局が「宇宙戦争」を放送したことがある。この時は、「ニュージャージー州プリンストン郊外で、火星の攻撃が開始されました！」と臨時ニュースそっくりの語りで放送したので、何十万人ものラジオ聴衆が火星の攻撃を現実だと思い込み、恐怖に震え、パニックが発生した。この事件はアメリカ人でなくても、SFファンの間では有名な話である。今回の映画封切りの当日(6月29日)、出勤途上の自動車の中で私が聞いたラジオ放送もこの1938年の「事件」のことを語っていた。

【映画“Independence Day”】

1996年のアメリカ映画“Independence Day”も、HGウェルズの原作や53年の映画化版から幾つもの要素を借用している。例えば、超音速ステルス爆撃機が核ミサイルで侵略者の巨大円盤型宇宙船を攻撃するが、やはり敵のバリアーによっていったん失敗に終わる。このくだりは53年版「宇宙戦争」とそっくりである。この映画では、その後、敵の防御バリアーを一時的に麻痺させるために、敵宇宙船のコンピューター・システムをハッキングして、「コンピューター・ウイルス」を送り込む。ウイルスが敵のシステムを一時的に混乱させ、バリアーを封じること成功した僅かな瞬間に核ミサイルを撃ち込み、敵宇宙船の撃破に成功する。コンピューター・ウイルスの利用は、HGウェルズの原作で地球在来のウイルスが免疫のない火星人を最後に滅ぼすプロットの現代版パロディーである。

この映画のストーリーでは、全地球を襲った異性人の侵略に対して、かつて空軍の戦闘機パイロットだった米国大統領自らが戦闘機に乗り、戦闘機部隊を指揮して戦う。最後に地球からの異性人撃退を果たした日を“New Independence Day”として祝う。はっきり言って、アメリカ人でなければ、とても耐えられないような風味で出来上がっている。「デモクラシーの帝国」(藤原帰一著、岩波新書、2002年)の中で著書の藤原教授は、この映画に表れた米国の政治・文化的観念を徹底的に分析・批判している。要するに、自らを自由と正義の体現者と信じ、自国のための戦いを世界のための戦いと容易に同一視してしまう「アメリカ帝国のイデオロギー」が無邪気かつ露骨に横溢した映画なのである。

【異星人に「殺戮される恐怖」、甦る9・11のトラウマ】

さて、今回の“War of the Worlds”は上々の出来映えである。異星人に「殺戮される恐怖」をたつぷりと堪能できる。まず、侵略者の戦闘マシンがHGウェルズの原作通りに、3本の足を持った巨大機械として描かれているのが嬉しい。重厚な金属の足を持った巨大なマシンが「ブウォー〜ン」という咆哮を発し、住居を破壊し、人々を踏みつけながら襲って来る様が恐怖をかきたてる。マシンから放射されるビーム(光線)は一瞬で人間を粉碎・蒸発させ、建物を炎上させる。子供の頃初めて「映画ゴジラ」を見た時の鳥肌が立つような感覚が呼び起こされた。

トムクルーズ演じる主人公レイはNY近郊の街で戦闘マシンの襲来を受け、娘レイチェルと息子ロビーを連れて、逃避行を始める。命からがら別れた女房のボストンの実家に最後辿り着くまでが物語である¹。映像のほとんどは、戦闘マシンの殺戮から逃げる主人公一行の視線の高さで構成されている。映画“Independence Day”では、敵宇宙船と米国空軍の空中戦闘シーンや、パイロットの視点からの映像が沢山見られたのと対照的に、この映画は逃げ惑う地上の人間の視点で映像が構成されている。このことも映画の臨場感を高めているようだ。

更に監督スピルバーグは、観客の臨場感を高める「隠し味」を使っている。それは観客に9・11テロを想起させる「隠し味」である。例えば、異星人の戦闘マシンは市街の中心に突如として地下から

¹ 主人公レイの別れた女房は金持ちの新しい夫と結婚している。二人の子供は離婚仲裁の結果、元の父親であるレイと定期的に一定期間会うことが定められたようだ。分かれた女房と新しい夫が二人の子供を週末レイの自宅に預けるところから物語は始まる。「女房と離婚した悲哀を味わう男性」という人物設定は、アメリカ映画でもとても頻繁に登場する。実際そうした境遇の経験者が相対的に多いことであろう。そうした人物設定が良くうけるのは、男性は「女のがままのおかげで、男はこんなに苦労しているだけ」とボヤキを共感でき、女性は「女房を大切にしないと、こういう大変なことになるのよ」と思うことができるからだろう。

出現する。建物を倒壊し、ビーム砲で手当たり次第に破壊し尽くす戦闘マシーンの攻撃から逃げる人々のパニックは、9・11のWTCの倒壊から逃れる人々の映像を重ねる。

主人公らは、ある夜非難した家の地下室で、もの凄い爆音、振動、閃光を経験する。朝になって恐る恐る地下室から出ると、家の半分が吹き飛ばされ、砕けて燃え尽きたジョット旅客機の残骸が眼前に広がっていた。このシーンは9・11でのジェット旅客機墜落現場(ペンタゴン他)を観客に想起させることでアメリカ人観客の9・11トラウマを刺激し、恐怖を煽る。

殺戮から逃れる人々がハドソン川を渡るフェリー・ステーションに集まってくるシーンでは、ステーションの壁や建物に、行方不明となった家族の安否を尋ねるステッカーやビラが貼りつくされ、やはり9・11後のWTC跡周辺を想起させる。

結末は原作と同じである。異星人は地球在来のウイルス、病原菌に免疫がなく、感染して次々と倒れ、侵略は失敗に終わる。地球を侵略するほどの科学知識・技術があれば、未知のウイルスや病原菌感染の危険も知り、その防御方法も備えているはずではないのか？などと野暮な疑問は止めておこう。

【文明の衝突と病原菌】

ところで、HGウェルズは異種生命環境との遭遇の結果、ウイルス、病原菌感染で異星人が倒れるというプロットをどこで得たのだろうか？ これは全くの想像であるが、もしかしたら彼は16世紀にスペインやポルトガルからの侵略・植民者との遭遇で、欧州人の持ち込んだ天然痘やハシカに免疫がなかった中南米現地人の多くが、これら伝染病の蔓延で死んだことにヒントを得たのかもしれない。

インカやアステカ文明が欧州からの少数の侵略・植民者の手で滅ぼされ、社会的な崩壊がもたらされた原因として、幾つもの要因が挙げられている。ひとつは銃に代表される兵器の技術的な格差である。もうひとつは、それまで新大陸にはなかった天然痘やハシカが欧州人により持ち込まれ、これらに対する免疫力のなかったインディオ達の間には伝染病が蔓延、加えて植民者により強制労働に狩り出されたことが加わり、16世紀に急速に人口を減少させてしまったと言われる²。

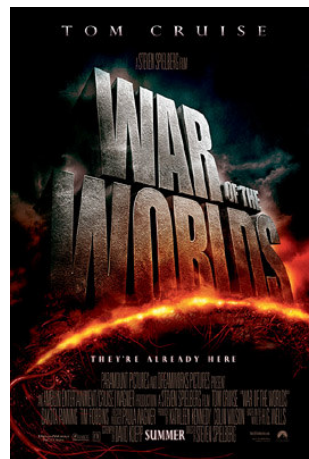
もし反対に欧州の侵略者が新大陸の未知の病原菌との感染に遭遇していたならば、その後の歴史は大きく姿を変えたことであろう。人類史は必然性よりも偶然性に支配されている。私の想像に過ぎないが、HGウェルズはこの歴史的な事実からヒントを得て、異星からの侵略者に遭遇した地球人類の救世主として病原菌のプロットを発想したのかもしれない。

【スピルバーグ監督の含意】

この映画には“Independence Day”と異なり、英雄的な空軍パイロットらも、大統領も登場しない。全てが逃げ惑う市民とその一人である主人公の視点で描かれている。異星人の超ハイテク兵器が轟音を発し、夜の闇に閃光が走る。その強力な破壊力に人々は戦慄し、パニックとなる。映画の終盤、私の心の奥から9・11のイメージを超えた別のイメージがわき上がって来た。米軍のハイテク兵器の攻

² 「銃、病原菌、鉄」 シャレド・ダイヤモンド、1998、邦訳出版：草思社

撃にさらされたバクダットの住民の恐怖も、この様なものだったのではなかろうか....。 そう感じたのは、果たして私だけであろうか？ 監督スピルバーグが 9・11テロを想起させる「隠し味」のもうひとつ奥に潜ませた含意が、ここにあるのではなかろうか。 もしアメリカ人観客もその様に感じたならば、彼らの感性も捨てたものではないのだが。



以上